
魔法少女リリカルなのはStrikerS うたかたの幻想

kuroishi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers うたかたの幻想

【Nコード】

N6613Q

【作者名】

kuroishi

【あらすじ】

わがままで、ろくでなしで、自分勝手に、しかし誰にも負けない
——世界で一番強い、そんな父親が消えた。
と思ったら、また2人もの父親になっていた。

魔法少女の父親、やっています。

エピソード（前書き）

ども、kuroushiです。

新作です。

あっちのほうも頑張りますが、なんだか無性にジェクト様を書きたくなりました。

楽しんで読んでいってもらうと嬉しいです。

エピソード

「ユウナちゃんわかってんな？」

彼は、そう叫ぶ。

「召喚獣を・・・」

「僕たちを・・・」

彼と少年の声が重なった。

「「呼ぶんだぞ！」」

そこで彼は、力と意識を失った。

「・・・さん・・・・・・・・クトさん・・・ジエクト・・・さん！」

はずだった。

（ジエクトSide）

おかしい。

まず始めに思ったことだった。

1つ目、服装がきつちりしているもんだった。

2つ目、死んだはずの嫁がいた。

3つ目、赤ん坊がいた。

4つ目、ここはザナルカンドじゃねーし、スピラでもなさそうだ。

5つ目、

生きてた。

看護師「ジエクトさん、おめでとございます、可愛い女の子です！」

「お・・・おう」

嫁「名前・・・どうしようかしら」

俺は・・・『シン』になって息子に倒されたはずじゃ・・・。

俺は・・・『夢』じゃなかったのか？

俺は・・・どこにいるんだ？

とりあえず、嫁の問いかけに答えた。

「・・・ティアナ・・・はどうだ？」

それは昔、ティードが生まれる前に女だったときのために考えていた名前だった。

嫁 「ティアナ・・・いいわね・・・」

満足そうにいつてから、嫁は眠った。

看護師「さて、ジエクトさん」

「んん？何だ？」

看護師「ティアナちゃんを産湯で洗ってあげてください」

「わかった」

俺は、乱暴ながらもやさしくティアナを洗った。

これが、ティアナ・ランスターが生まれた瞬間だった。

＼ジエクトSide End＼

エピソード（後書き）

どうだったでしょうか。

勉強する、といいながらも書いてしまいました。

やっぱりFF10は最高ですね。

感想、アドバイス等がありましたらどしどし書いてください。
それではっ。

人物紹介（前書き）

2 / 6 書き直しました。

人物紹介

～人物紹介～

ジエクト・ランスター（主人公）

年齢 36歳

所属 陸士隊 特別救助隊隊長 一等陸佐

魔法 近代ベルカ式 黒魔法 白魔法

デバイス 近代ベルカ式インテリジェントデバイス 「シン」 男性

カードリッジシステムあり

近代ベルカ式ユニゾンデバイス 「??????」 ?

魔道師ランク SSS+ （ときおりEX）

能力 黒魔法がほぼ全て使える

白魔法はケアル系とレイズとエスナが使える

『部分召喚』

究極召喚したときの姿の一部分だけを出すことができる
大きさは人並み

『劣化召喚』

究極召喚の劣化バージョン、パワーが10分の1
大きさは人並み

『究極召喚』

「ブラスカの究極召喚」になれる
デメリットあり

『限界突破』

自分の限界を超えることが出来る
デメリットあり

その他詳細

2つ名は、「無敵の騎士」

デバイスのシンの待機時は指輪

ゲンヤ・ナカジマとは親友

普段は、ゲンヤ・ナカジマのような制服姿

バリアジャケットは、FF10のあの服

武器は、大剣

自分のことについて知ったのは、シンから聞いたから
子煩悩。

人物紹介（後書き）

その他、希望など、出してほしい人物がありましたら感想欄に書いてください。
それでは。

エピソード2

＼ジエクトSide＼

ティアナが生まれた次の日、俺は情報を整理していた。
図書館に行ったり、新聞を読んだりしてな。

シンからも聞いたな。

分かったことは、

1つ目、ここはスピラじゃないし、ザナルカンドじゃない。

2つ目、魔法文化がある。

3つ目、機械マキナは嫌われていない。

4つ目、『シン』はいない。

5つ目、魔法を使うには、デバイスとやらを使うらしい。
位だ。

????「親父」

「なんだあ、ティーダ?」

まだ分かってないのは、俺に子どもが2人いることだ。

ティーダ「妹の名前何にしたの?」

「ティアナだ」

シン『とても可愛い子でしたよ』

俺とシンは言った。

ティーダ「ふーん・・・親父！」

「なんだ」

しつこい息子だな。

ティーダ「俺、執務官になるから、ここから出て行く！」

11歳にしてはやるようだが、俺様にはかなわない。
そんなヤツが執務官の訓練ができと思えない。

「背ばつか伸びて、ひよろひよろのヤツが執務官が出来るのか？あ
あん？」

ティーダ「親父には負けるけど・・・友達には負けないから、大丈
夫だ」

自信がなさそうに言った。
基本俺はやりたいようにやってるし、他人が何をやろうと俺は何も
言わない。

「ティーダ、無限の可能性ってヤツにかければいい。そうすればど
うすりゃいいかが分かるはずだ」

ティーダ「・・・親父」

「おお？」

ティーダ「・・・・・・・・・・ばか」

「ははははは………」

「それで良さ」

ティーダ「……じゃあ」

「おう、いいいい」

ティーダ「ああ！」

俺はその背中を見送った。

それから10年後

くジェクトSide Endく

エピソード2（後書き）

どうだったでしょうか。

かなり速いスピードでお送りしています。

感想、アドバイス等ありましたら感想欄に書いていってください。

オリジナルの人物や出してほしい人物がありましたら、どしどし言
ってください。

それではっ。

エピソード3

くジエクトSideく

その話が来たとき、俺は耳を疑った。

『ティーダが死んだ』

ありえない。

『任務中に』

首都航空隊所属の一等空尉で執務官志望のエース魔導師だったのに、

『違法魔導師を捕縛するはずだったのに』

ティーダが負けた？

『対象の魔導師との交戦で敗れた』

ティアナ「お父さん、お兄ちゃんは？」

上司A「やっぱりだめだったよ、あんな青いヤツなんて」

上司B「そうだ。ヤツは管理局の恥だ」

上司A「死んでも犯人を捕まえるべきだった」

非情な声が聞こえた。

「てめーらに何が分かる」

上司A「何だ？貴様は」

「あいつはきつと正々堂々と戦ったはずだ。そして・・・」

上司B「そして？」

「てめーらみてーなゴミにはならなかった」

上司A「ゴミだと？」

上司Aが怒った口調で言ってくる。

だが、俺の怒りは臨界点を突破していた。

「だから・・・だからてめーらみてーなやつ等に、息子のことを悪く言われたくねーんだよ！！」

俺は、セツトアップをして部分召喚をした右手で拳を握った。

悲しみと怒りが混ざった感情が、心の中で渦巻いていた。

「殴られる覚悟はあるか？」

上司A「ひっ・・・お、おい貴様そんな事をやってどうなるかわかっているのか？」

今すぐに殴ってやつても良いが、それじゃあ家族に迷惑がかかる。そんなことは、ティードは望んでいない。けっ、忌々しい。

「・・・けっ」

俺はこのとき、ティアナに俺の知っている限りの技と魔法を教えることを決意した。

それから毎日、俺は知っている黒・白魔法をティアナに教え込んだ。「つらい」とか「やめたい」なんて言わない。

きつと悔しい気持ちがあるからだろう。

ティアナに優しくかったあいつ、俺より弱かったが強かったあいつ、いろんな思い出が浮かんでくる。

だが、思い出は優しい。

だから、心の中でしっかりとっておく。

じゃないと自分が甘くなる。

ティアナはのみこみが早かった。

白魔法は大抵のものを、黒魔法は5年で中級魔法までを覚えた。

もしかしたら、あいつのことを越すかもしれない。

そんな事を思つて7年が過ぎた。

シエクトSide End

エピソード3（後書き）

ども、kuroishiです。
早くも3話まで作りました。

エピソードは、ここまでです。

次から本番です。

それではっつ。

昇格試験 1（前書き）

ども、kuroishiです。
楽しんで読んでいってください。

昇格試験 1

＼ジエクトSide＼

俺は、ティードの墓の前にいた。
遺骨は見つからなかったから、墓だけを作った。

「・・・俺より先に逝くなんてよ」

そこにはいない息子に言った。

ーピッ

どこからか連絡が入ったようだ。

「どちらさんでしょうーか」

「???」「俺だ、ゲンヤだ」

俺の親友が話しかけてきた。

ゲンヤ「おっと、墓参りの途中だったか？」

「いや、そうゆうわけじゃない。それよりなんだ、仕事か？」

ゲンヤ「いんや、俺の娘とお前の娘が今日、ランクの昇格試験だつてことは覚えているよな？」

「ああ、もちろんだ」

ゲンヤ「特別に、見学を許してもらった。どうだ、一緒に行かないか？」

酒を飲みに行く様な口調でゲンヤは言った。

全く、俺たちには関係のないことだが、あいつらにとっては大事な日だ。

まあいいか。

ちよっかいをしに行くわけじゃあない。

なら、行っても良いだろう。

「ああ、行こうか。どこで待ち合わせる？」

ゲンヤ「はっ、むさいおっさん同士がどうして待ち合わせなきゃいけないんだよ。現地で集合だ」

「はははっ、それもそうだな」

ゲンヤ「あつちでへりを待たせている、早くしろよー、遅いとおいてくからな」

「了解した、善処してやるよ」

ゲンヤ「12時にな」

「ああ」

俺は急いで墓まで乗って来たバイクへ駆け寄り、飛び乗った。

～ジエクトSide End～

～ティアナSide～

今日は私と私のパートナーのBランク昇格試験。
結果を確実にしなくては・・・とは思っただけど、

スバル「フンツ、ハッ！ セイツ、ヤツ、ハッ！！」

「スバル、あんまり暴れていると試験中にそのオンボロローラーが
いつちやうわよ？」

何で私のパートナーはこんなに暑苦しいんだろう・・・？
お父さんも、暑苦しいし。

スバル「うげえ、ティア。やなこと言わないで・・・ちゃんと油
も差してきた！」

スバルは若干拗ねながら準備運動をするけど、私は無視してデバイ
スの調子確かめる。

一通りの確認が終わった所で時間を見ると試験開始の時間まで後僅
かといった所になっていた。

それと同時に私達の目の前に通信が開くと、試験官らしい人が出て
きた。

試験官「おはようございます！ さて、魔導師試験の受験者さん二

名。揃ってますか？」

「はい！」

試験官「確認しますね。時空管理局陸士386部隊所属のスバル・ナカジマ二等陸士」

スバル「はい！」

試験官「ティアナ・ランスター二等陸士」

「はい」

試験官「所有している魔導師ランクは陸戦Cランク。本日受験するのは陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で間違いないですね？」

スバル「はい」

「間違いありません」

声が重なる。

一通りの確認が終わって後は試験が始まるのを待つだけになった・・。

ティアナSide End

ジエクトSide

やべえ。

バイクで急いで来たものの、12時には間に合いそうにない。
あと・・・3分・・・。
遅れたら、怒るだろーなー。
ゲンヤ、厳しいからなあ。

「ハア・・・」

ついついため息が出た。

シン『マスター、俺がバイクにちよつと細工していいか？』

「それで間に合うか？」

シン『ああ、絶対間に合う』

「じゃあやれ」

ードオーン！

「ぬああああああああー！！」

いきなり速度が上がった。

十分、スピード違反をしている速さだ。

これはちよつと・・・いや、かなり見つかったら大変だ。
だが、これなら間に合いそうだ。

と言いたいところ、全くこのバイクが言うことを聞いてくれない。

「おいシン！制御できねーじゃねーか！？」

シン『デヘッ』

「ふ・ざ・け・ん・じゃ・・・ねええええええ!!」

俺、かなりヤバイかも。

〜ジエクトSide Ends〜

Sides

うん、悪くない動きだね。

スバルは中からターゲットをまとめて破壊。

ティアナは外から正確に落としていくことで、お互いの攻撃範囲が被ることなく早くターゲットを殲滅できるような動きだった。

あらかたのターゲットを破壊すると二人はペースを乱さずに合流した。

「ここまで順調この後どう動くのかな？」

という少し不安もあったが、フェイントを織り交ぜながら攻撃をすることでうまく次のステージもクリアできそうだった。

「この分なら、心配いらないかな？」

私がかかる息を吐いて気持ちを落ち着けると・・・突然映像が途切れた。

「ん？流れ弾か何かが当たったのかな？……一応、様子を
見に行こうか。レイジングハート」

レイハ[㊦] オールライト、マイマスター[㊧]

と思ったら、

「???」「うわあああああああああ!」

外から声が聞こえてきた。
そして、

「ドガアーン!

壁が壊れて、バイクがつつこんできた。
自分の危機を感じた私はセツトアップをして乱入者に一言言った。

「な、何ですか!? 今はランク昇格試験中ですよ!」

「???」「・・・ああ、すまねえ」

「あなたは何者ですか?」

「???」「俺か?俺はジェクト・ランスターだ。今日は娘の試験の見学をしに来た」

「???」Side End「

昇格試験 1（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今、シンの性格をどうするか悩んでいます。

あ、あと、アンケートの件は、2 / 1 3 の 8 時あたりまでを締め切りしようと思っています。作者が 2 4 まで起きる自信がないためです。

もしかしたら、それを過ぎても採用する可能性があるため応募、待ってます。

感想、アンケート、アドバイス等をいただけたら嬉しいです。
それではっっっ

更新休止について

すみません。

まことに勝手ながら、私 k u r o i s h i は当分の間『魔法少女リリカルなのはStrikers うたかたの幻想』を書くのを休みます。

理由は、

1、受験期に入ったので勉強のため

2、『小説家に本気でなろう』などの小説の書き方の小説を読み、自分の至らなさを感じたからです。

その代わりといっではなんですが、新しくリリカルなのは「転生」「チート」というポピュラーなものを書いていきたいと考えております。

しつかり舞台設定や、キャラ作りなどを勉強してからまた戻ってきます。

ちなみに、アンケートはプラスカー行を連れてくる予定です。

DF Fの方は番外編で絡ませるつもりです。

アンケートのご協力、ありがとうございます。

また会う日まで、それではっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6613q/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS うたかたの幻想

2011年10月8日15時54分発行